

# 初期 社會主義研究

2021

第29号

## 特集 1920年前後 東アジア

小野容照 山本健三 大橋秀子 川上哲正  
大和田茂 加藤哲郎 山泉 進 金野文彦

朝鮮独立宣言一九一九・二・八記念碑  
(韓国YMCA玄関前 東京都千代田区神田猿樂町)



### 〈資料紹介〉

井上要旧蔵資料「不去庵(菴)寄題集」について

岡崎

初期社会主義研究会

初期社会主義研究

29

特集

一九二〇年前後 東アジア

初期社会主義研究会



9784827212990



1923021030001

ISBN978-4-8272-1299-0  
C3021 ¥3000E

定価 本体3000円+税

EARLY JAPANESE SOCIALISM STUDIES

No.29

2021

Contents

|   |                   |
|---|-------------------|
| The Eye of Early Socialism  | Kurokawa Iori     |
| Feature: East Asia Circa 1920   |                   |
| In Gyu of Nakamura: Internationalization of Korean Independence Movement and the March 1st Declaration of Independence  | Ono Yasuteru      |
| Diffusion of Kropotkin's Ideas in East Asia in the Early 20th Century: Ideology of Science and Morality   | Yamamoto Kenzō    |
| Lester F. Ward's "The Gynaecocentric Theory" in Relation to the United States, Japan, and China: A Focus on Kaneko Kiichi, Josephine Conger, and Sakai Toshihiko                              | Ōhashi Hideko     |
| Considering Asianism in the Gap Between Japan and China   | Kawakami Norimasa |
| Issue of Chinese and Korean Workers Within the Works of Hirasawa Keishichi: Significance of the Play <i>Hitojisha</i> on the Eve of the Great Kantō Earthquake                                | Ōwada Shigeru     |
| Centennial of the Founding of the Comintern, A Look Back on 50 Years of Research: The Illusion of Revolutionary Violence and Military Discipline and the Paradigm Shift in Popular Solidarity | Katō Tetsurō      |
| Case of Lee Bong-chang and the High Treason Incident (Materials): "Trial Preparation Record" and "Trial Record"   | Yamaizumi Susumu  |
| <Research Notes> A Reconsideration of the Critique of Military Dispatch to Siberia in the Journal <i>Shinjin</i>  | Konno Fumihiko    |
| Ōno's Assimilation of the Ideas of Emma Goldman: Focusing on Comparisons with Ōsugi Sakae and Arahata Kansō   | Tanaka Hikaru     |
| The Circle of Sakai Toshihiko's Farmer-Labor School (Part 6): Regarding the Plan to Invite Kawauchi Tadahiko to be a Guest Lecturer at the Proletarian Science Research Center                | Koshōji Toshiyasu |
| <Research Notes> Expansion of Life: Ōsugi Sakae's Self-transcending Thought   | Watanabe Kazuki   |
| Essay   |                   |
| A Book that Accompanies the Collected Works of Kōtoku Shūsui: Kihara Emiko's <i>The Life of Rui: The First Wife of Kōtoku Shūsui</i>  | Iwasaki Minoru    |
| Inspired by David Graeber's <i>Bullshit Jobs</i>  | Takeuchi Tomoaki  |
| Research Paper  |                   |
| Regarding <i>Fukyoan Kidaishū</i> in Inoue Kaname's Former Collection   | Okazaki Hajime    |
| Book Reviews  |                   |

ASSOCIATION FOR EARLY JAPANESE SOCIALISM STUDIES  
28 KANDA-JINBOCHŌ 1CHŌME, CHIYODAKU, TOKYO 101-0051

## コミンテルン創立100年、研究回顧50年

——革命的暴力・軍隊的規律の幻影、民衆連帯のパラダイム転換

加藤 哲郎

### 1 ス페인風邪一〇〇年、 コロナ禍の社会運動

二〇二〇年の世界と日本は、新型コロナウイルスへの恐怖と不安におおわれた。日本ではさまざまな社会運動も失速し、ウェブ上でのツイートやSNS、ZOOMを通じての討論にとどまらざるをえなくなった。人と人との交流もオンラインになり、大学も図書館も自由に使えず、いたるところで時間と空間が分断された。グローバル資本主義のもとで、国境は出入国禁止と検疫で閉ざされ、ナショナリズムが強まった。国連のWHO（世界保健機関）のような国際機関の役割も限定的だった。他方では、ヨーロッパで政府による都市封鎖・外出制限に対する民衆の抗議行動

ベラルーシの女性運動、アメリカ大統領選さなかのBLM（Black Lives Matter）運動、香港やタイでの民主化運動をめぐる攻防など、さまざまな形態での民衆運動の表出も見られた<sup>①</sup>。

大きな災害やパンデミックがあると、歴史が振り返られる。東日本大震災後に幸徳秋水を読み直した私は、幸徳の一九〇六年サンフランシスコ大地震時の「エリートパニック」と「災害ユートピア」無政府共産制」体験に、彼の帰国後急進化の秘密を見た<sup>②</sup>。コロナウイルスの場合には、一九一八―二〇年の「スペイン風邪」だった。第一次世界大戦終結の要因にも、かつての「パンと土地と平和」を求め、ロシア革命や「帝政打倒」のドイツ革命ばかりでなく、連合国・中央同盟軍双方における兵士の疫病蔓延が加わった。「スペイン風邪」のアメリカ参戦起源も、改めて注目

された。歴史は過去と現在の対話であるから、カミュの『ペスト』のような書物が世界的にベストセラーとなるのは避けがたい。ロシア革命直後のモスクワ、レニングラードでは二人に一人が感染し、「ポリシエヴィキの黒い悪魔」ことヤーコフ・スヴェルドロフ全露中央執行委員会議長は、この病気で死亡した<sup>③</sup>。日本でも「平民宰相」原敬自身が感染し、戒厳令や外出禁止令が米騒動を収束に向かわせたことが、改めて注目された<sup>④</sup>。

社会運動史研究でも、似た事情がある。一九八九年の東欧革命・冷戦終焉・ソ連解体以降、理論的にはソ連型のマルクス・レーニン主義と階級闘争論の崩壊が自明とされ、ロシア革命とコミンテルン（共産主義インターナショナル、第三インター、一九一九―四三年）を基軸とした社会革命論は後景に退いた。一九九〇年代から新自由主義とグローバルゼーションへの対抗軸として、アナキズムや協同組合主義への関心が復活し、自然環境・生態系との共存・共生、気候変動への抗議運動が台頭した。コンピュータとインターネットの普及にもなつて、世界社会フォーラム（WSF, World Social Forum）のような情報共有と民衆連帯の新しいかたちが見られた。私はそれらを、アントニオ・グラムシの一九世紀「機動戦・街頭戦」から二〇世紀

「陣地戦・組織戦」への論理にヒントを得て、二一世紀初頭から「陣地戦・組織戦から情報戦・言説戦へ」と定式化してきた<sup>⑤</sup>。

社会主義・共産主義の言説戦・語りにおいても、そうした変化は避けられない。「情報戦の時代」には、社会運動も、文化や芸術と、SNSなどコミュニケーション・ツールとのコラボレーションが必要になる。

編集委員会から与えられたテーマは「コミンテルンの一〇〇年」であるが、この二〇二〇年の状況変化を踏まえて、特集テーマである「一九二〇年代の東アジア」にも関説できるかたちで、私の研究上の回顧と反省を記しておこう。

### 2 コミンテルン創立一〇〇年と世界の社会運動研究

二〇一九年は、コミンテルン創立大会（一九一九年三月）から一〇〇年だった。二〇一七年のロシア革命一〇〇年にはいくつかの国際会議や出版物があったが、コミンテルンの一〇〇年については、ほとんど何も語られなかった。学術的にも社会運動としても大きなイベントはなく、ゾルゲ事件研究の関係でモスクワでの小さなコミンテルン研究



ワークシヨップに誘われたが、私は断った。大きな通史的  
研究書も、ケヴィン・マクダーマット&ジェレミ・アグニ  
ュー『コミンテルン史』（一九九六年）、ステファヌ・クル  
トワ他『共産主義黒書』（一九九七年）以降、出ていない  
ようである。

ただしウェブ上で検索すると、いくつか興味深い事実が  
みつかった。どうやら一九一九年三月のコミンテルン創立  
大会よりも、一九二〇年七月のコミンテルン第二回大会の  
方が、「二〇〇周年」で意味づけられているのである。

それには理由がある。今や常識ではなくなつたが、コミ  
ンテルンは「第三インターナショナル」だった。マルクス  
Ⅱエンゲルス『共産党宣言』と一八四八年ヨーロッパ革命  
を受けて、「万国の労働者、団結せよ」を体現すべく創設  
されたのが、国際労働者協会Ⅱ第一インターナショナル  
（一八六四―七六年）だった。マルクスも総評議員の一人  
として加わっていたが、初期社会主義のオーウェン風協同  
組合の流れも、サン・シモン主義も、労働組合主義者も入  
っていた。最終的にはバクーニン派アナキズムとの決裂  
で社会主義の国際連帯の第一波は終焉するが、マルクスの  
死後、第二インターナショナル（一八八九―一九一四年）  
に受け継がれた。まだヨーロッパの規模であったが、第二

インターの段階で、各国労働組合に各国社会主義・労働者  
政党が加わり、今日の欧州（EU）議会にまで受け継がれ  
る社会主義政党レベルでの国際連帯が制度化した（一九二  
三）社会主義労働インター、一九五三）社会主義インタ  
ー）。特に反戦平和の問題では、世紀の変わり目に大きな  
役割を果たした。

その第二インターナショナルが、第一次世界大戦の開戦  
にあたって、主力のドイツ社会民主党をはじめ、自国の戦  
争に反対できず労働者階級を戦場に送つたことが、「プロ  
レタリア国際主義の裏切り」「第二インターナショナルの  
分裂と崩壊」として、第三インターⅡコミンテルン設立の  
背景となった。「戦争を内乱へ」導くレーニンとボリシェ  
ヴィキ党に指導されたロシア革命と、「敗戦国革命」をも  
たらしたドイツ帝政打倒Ⅱワイマール共和制移行が、実践  
的指針となつた。

コミンテルン創立大会は、一九一九年三月にモスクワで  
開かれた。一月の招待状は、三九の共産主義組織・革命グ  
ループにあてられたが、参加した五一名中ロシア国外から  
は九名のみだった。最も重要な組織であるドイツ共産党  
（KPD）は、スパルタクス団から名前を変えたばかりで、  
一月に指導者ローザ・ルクセンブルクとカール・リープク

ネヒトを失っていた。しかしローザの遺訓を守り、コミン  
テルン創立には加わらず、大会では「棄権」した。

第二インターナショナルとは別の新しい国際連帯のあり  
方は必要と確認されたが、それがボリシェヴィキ型の「新  
しい型の党Ⅱ共産党」「単一世界政党」となることは、ま  
だ未決であった。創立大会の意義は、むしろロシア革命を  
受けて、各国に支部Ⅱ共産主義政党を作ることについての  
アピールであった。

その具体的なあり方は、一九二〇年七月―八月の第二回世  
界大会で定められた。かの「二一カ条の加入条件」で、第  
二インターⅡ社会民主主義との完全な訣別のうえに、「鉄  
の規律」の「民主主義的中央集権制（以下、民主集中制）」  
の採用が義務づけられた。しかもそれは、コミンテルン本  
部・執行委員会と各国支部Ⅱ各国共産党との間にも、各国  
指導部と一般党员との関係にも、適用されるとされた。そ  
れが、ロシア革命を範とした、当時の「プロレタリア国際  
主義」の内実であった。

今日コミンテルン一〇〇周年を記念しているアメリカ共産  
党、インド共産党（マルクス・レーニン主義）、トルコ共  
産党などは、ほとんど大衆的影響力を持たない「ウェブ上  
の前衛党」である。彼らは、コミンテルンが提示した軍隊

型規律で結ばれた少数精鋭の集権的前衛党に、コミンテル  
ンの残した伝統の意義を見出している。

コミンテルン第二回大会の主要な意味は「新しい型の  
党」の創設にあつたが、今日一〇〇周年にあたり顧みられ  
ている、もう一つの意義がある。それは、もともとコミン  
テルンとは関係ないキューバを除くと、今日の世界に生き  
残つた共産主義政党の支配国家が中国・北朝鮮・ベトナム  
であり、これらはいずれも第二回大会の「民族・植民地テ  
ーゼ」の延長上で作られたアジアの共産党の末裔であるこ  
とと関係する。つまり、それまでの第一インターナシヨナ  
ル、第二インターとは異なる第三インターの特徴として、  
帝国主義本国でのプロレタリア革命にばかりでなく、半植  
民地・植民地での労働運動と民族解放運動との結合が、第  
二回大会議場でのレーニンⅡロイの論争以来続いていた。

何よりも、アジアの共産党の多くは、このコミンテルン  
第二回大会の前後に初めて非合法で結成され、二〇二〇年  
代に党創立一〇〇周年を迎える。コミンテルンの中核だつ  
た旧ソ連・東欧圏とヨーロッパ諸国の共産党が一九八九―  
九一年にはば解体し、または社会民主主義政党に復帰して  
いったのに対し、もともと労働運動も社会民主主義もなか  
つたアジア・中東・中南米地域では、コミンテルン支部と

しての共産党結成とは「政治の始まり」を意味した。

ただし、日本共産党を含むアジアの共産党が、コミンテルン一〇〇周年を積極的に顕彰する気配はない。しかし、いまなお前衛党と武力による革命にあこがれる群小左翼グループにとっては、ソ連・東欧社会主義はなくなっても、中国・北朝鮮・ベトナムがあるがゆえに、コミンテルンの意味での「世界革命」へのあこがれは幻想が残るのである。

### 3 私がコミンテルン研究を志した頃

#### ——日本資本主義論争と世界変革の夢

私がコミンテルンを直接の研究対象としたのは、一九七八年九月の名古屋大学助手時代であった。田口富久治教授のもとで、政治学の助手論文を書いていた。名古屋大学図書館には、当時のコミンテルン研究の第一次資料であるイタリア・フェリトリネッリ社の復刻資料集が入っていた。各大会・執行委員会の議事録・決議・決定のほか、機関誌 *Kommunistische Internationale* (カー・イー) 誌や機関紙 *Internationale Presse Korrespondenz* (インプレコール) を自由に読むことができた。ただし、旧ソ連のコミンテルン秘密資料は公開されておらず、ソ連邦ML研の公式的な

『共産主義インターナショナル概史』(一九六九年)が村田陽一訳『コミンテルンの歴史』(上下、大月書店、一九七三年)として日本にも紹介され、村田陽一編『コミンテルン資料集』(大月書店)が一九七八年から出はじめていた。そこには前史がある。私自身は学生時代、というよりも一九六八―一九六九年東大闘争の無期限ストライキのバリケードの中で、マルクス主義理論と日本資本主義論争を学び、特に野呂栄太郎の理論に惹かれていた。卒業後の大月書店編集部で野呂栄太郎や村田陽一らと親しく交わり、一九七二―七三年には大月書店派遣で旧東独社会科学研究所に学び、主としてドイツ労働運動史を研究した。その頃公式的な『コミンテルンの歴史』でも、一九二〇―三〇年代の

「社会ファシズム」論や「左翼社会民主主義主要打撃」論は「誤り」とされていた。コミンテルン日本支部に発した日本共産党の『日本共産党の五〇年』(一九七二年)もそれを踏襲していたが、日本資本主義論争と東独での研究で、コミンテルン全体の歴史を見直すべき、二つの問題を見出した。

一つは、一九一九―四三年のコミンテルンの歴史の中で、最も理論的にも実践的にも問題の多い「社会ファシズム」論の最盛期一九三二年に作られた、日本に関するいわゆる

「三二年テーゼ」が、戦後日本の歴史学でも日本共産党の歴史においても、戦前最高の理論的達成とみなされていたことである。野呂栄太郎・平野義太郎・山田盛太郎等の『日本資本主義発達史講座』(岩波書店)も、「三二年テーゼとの偶然の一致」という政治的観点から「権威」づけられていた。ドイツ共産党など他国の共産党史を学ぶと、一九三二年頃のコミンテルンは、政治的にも理論的にも貧困で、ナチスの台頭を許した革命情勢逼迫論など多くの「誤り」があった時期であった。それゆえに一九三三年頃からの第七回世界大会(一九三五年)の反ファシズム統一戦線・人民戦線に転換するのであったが、日本共産党と日本の歴史学だけは、なぜか「一九三二年テーゼ」を金科玉条にしているように思えた。

いわゆる「資本主義の第三期」論、「階級対階級」戦術、「革命的情勢」の過大評価、「社会ファシズム」論、「左翼社会民主主義主要打撃」論、ソ連邦擁護絶対の「平和主義」、等々が出てくる理論的根拠を辿ると、「資本主義の全般的危機」というコミンテルン特有の世界資本主義論が見えてきた。理論的には、レーニンでもスターリンでもなくブハーリン起源の発想であり、いわゆる唯物史観の発展段階論を横倒しにして、現代世界を①ソ連社会主義と資本主

義の体制間矛盾、②階級間矛盾、③民族間矛盾、④諸資本間競争で把握する矛盾論的認識枠組で、これら「四大矛盾」をもとに「三大革命勢力」①ソ連邦国家、②先進国プロレタリアート、③植民地民族解放運動を、この優先順位で導く論理であった。戦争も革命も、ソ連社会主義防衛を基軸に、各国支部は各国共産党を従属させるものだった。私がコミンテルンを批判の対象とした頃、イマニエール・ウォーラーsteinの世界システム論や国連開発計画(プレビッシュ報告)にも影響を与えたアンドレ・グンダー・フランク、サミール・アミンらの従属理論など、レーニン「帝国主義論」やコミンテルンの「全般的危機論」とは大きく異なる世界史把握が生まれていた。私は、コミンテルン時代の非正統理論であるグラムシやローザ・ルクセンブルクを学び、「背教者」カウツキーや「修正主義」ペルンシュタインをも読み直し、現代世界の認識枠組としては、ウォーラーsteinに惹かれていた。

### 4 統一戦線・人民戦線の「トロイの木馬」的

#### 限界

私が一九七〇年代にコミンテルンの研究を始めるにあた

って、いまひとつひっかかったのは、ソ連における「スターリン粛清」とコミンテルンの「反ファシズム統一戦線」の同時並行の意味であった。コミンテルンの歴史で戦後にかけて肯定的に継承されたのは、一九三五年第七回世界大会のデイミトロフ書記長報告、いわゆる反ファシズム統一戦線・人民戦線論だった。なぜソ連国内におけるスターリン反対派総粛清と、先進国でのファシズムに抵抗する社会民主主義を含む「幅広い」共闘が両立しえたのか、それが疑問だった。

背景には、いわゆるユーロ・コミュニズムの政治的台頭があり、J・ルカーチ、A・グラムシらの再読、J・ハバース、J・ヒルシュ、C・オッフエ、L・アルチュセー、N・ブーランザス、E・ラクラウ、C・ムフ、B・ジエソップ、S・ホールら「西欧マルクス主義」系譜のネオ・マルクス主義の百家争鳴があった。日本でも、スターリン主義時代のコミンテルンの負の遺産を清算するためか、デイミトロフ報告以外にも、フランスで人民戦線政府成立を可能にしたトレーズ、「平和主義」を肯定的に位置づけたイタリア共産党トリアッチらの文献が紹介されていた。<sup>10)</sup>

そうした文献、特にコミンテルン第七回大会の関係資料を読み進めると、いわゆる「社会ファシズム」論や「左翼

ゆるスターリン粛清の最盛期であった。スターリンに反対する旧指導者ばかりでなく、党・政府・軍の中枢からスターリン権力に反抗する可能性のある人物をすべて排除し、銃殺刑ないし強制収容所に送った。コミンテルン傘下の在外外国人共産主義者も例外ではなく、むしろ典型的な粛清犠牲者だった。

私の場合、東独でドイツ労働運動史とともに学んだ日独関係史のなかで、文部省派遣でドイツに留学していた国崎定洞という東大医学部助教が、ナチス政権掌握時にドイツ共産党に入党し、日本に帰らず、そのままモスクワに亡命して行方不明になった「事件」を追っていた。医学史の川上武と共に、ドイツで国崎と一緒に有沢広巳・千田是也・鈴木東民・平野義太郎らの証言と協力を得て、国崎がモスクワで「日本のスパイ」とされて粛清されたいところまでつきとめた。その真相の最終的究明は、ソ連崩壊とコミンテルン秘密文書の公開まで待たなければならなかったが、西ドイツに奇跡的に生存していた国崎のドイツ人妻フリーダと娘タツコの証言から、一九三七年当時のモスクワで、国崎ばかりでなく多数の日本人、亡命ドイツ共産党員・コミンテルン関係者が粛清されたことがわかってきた。

社会民主主義主要打撃」論の克服にもとづくと言われる共産主義と社会民主主義の統一戦線論にも、コミンテルン創立にまつわる社会民主主義観が、色濃く残されていることがわかった。統一戦線とは、共産党と社会民主党との共闘というよりも、社会民主主義の影響下にある労働者を共産党側に獲得することであった。政党レベルでは、社会民主主義の指導部の誤りを共闘の中で下部労働者に理解させることであった。統一戦線政府レベルでは、共産党の指導性を確保してプロレタリア独裁を実現していくための第一歩という位置づけであった。いわば、社会民主主義の中に入り込み、内部から共産党の影響力を広めていく「トロイの木馬」戦術であった。いわゆる「平和主義の再評価」も、実際にはソ連邦に対する資本主義諸国の戦争を不可避だが遅らせるための、時間稼ぎのマヌーバーだった。これらは、一九三〇年代のスペイン、フランス人民戦線では短命に終わり、実際にはコミンテルンの解散後、一九四五年第二次世界大戦でのソ連占領地域での中東欧社会主義国家で、事実上の共産党独裁になる「人民民主主義」として実現されることになった。<sup>11)</sup>

しかも、その反ファシズム統一戦線・人民戦線がコミンテルンで提唱され実践されていた時期が、ソ連邦ではいわ

そこで、ロイ・メドヴェージェフやR・コンクエストのスターリン主義・粛清研究などから、一見矛盾するかに見えるコミンテルンの統一戦線・人民戦線政策の「ブルジョア民主主義」再評価と、ソ連邦の「プロレタリア民主主義」プロレタリア独裁」のスターリン的純化<sup>12)</sup>大粛清が、同一の論理の唯物史観風時間差であることが見えてきた。それは、スペイン人民戦線における反対派粛清などで同時代にもあった。しかしこれも、東欧「人民民主主義」の多くが（ユーゴスラヴィアを例外として）、戦時中ソ連に亡命しスターリン粛清をくぐりぬけたソ連に忠実な共産主義者たちが戦後本国に戻り、当初の社会民主主義との連合政府から事実上の共産党独裁政府を作る中核になっていく、「トロイの木馬」の実行過程であった。統一戦線・人民戦線とは、「戦略」ではなく、あくまで「戦術」レベルのマヌーヴァーにとどまることが確認できた。

## 5 単一世界政党としてのコミンテルン

### ——軍事的集権規律の末端までの浸透

問題は、なぜそうなるかについての根拠の探求で、コミンテルンの組織構造に行き着いた。コミンテルンが唱える



「唯一前衛党」という概念と、プロレタリア世界独裁をめざす「単一世界政党」であることを、マルクス・レーニン主義の唯物史観からではなく、政治学の一分野である政党理論から解いてみようと考えた。

政治学における政党論という分野は、二〇世紀になって生まれたもので、M・オストゴルスキー『民主主義と政党組織』（一九〇三年）を先駆とし、R・ミヘルスの少数支配の鉄則やM・デュヴェルジェ、G・サルトルらの政党論・政党制論が知られていた。それらでは、コミンテルン起源の共産主義政党は、無視されるか、特異な例外的事例として扱われていた。本来社会の一部 (part) である政党 (Party) が、「社会と国家の架け橋」の役割を越えて、単一政党制＝一党独裁をめざしているとみなされたからである。ただし、ミヘルスのドイツ社会民主党 (SPD) の体験的分析から導かれた「少数支配の鉄則」は、修正を加えれば、レーニン主義・スターリン主義政党にも適用可能なものだった。

それらを使って、コミンテルンを「世界政党」と捉え、その四つの特徴、①単一世界政党、②労働者政党、③革命政党、④イデオロギー政党、の各レベルからコミンテルン総体を問題にしたのが、私の学術博士論文にあたる著作

の批判的総決算として意味づけられた。

しかし、もう一つ、論じなければならぬ問題があった。それは、そもそも「単一世界政党」を可能にし、各国共産党をその支部として従属させる組織論、「民主主義的中央集権制 (民主集中制)」の意味であった。コミンテルンの「加入条件二一カ条」(一九二〇年) や各国共産党用「模範規約」(一九二五年) では、上級の決定を無条件で実行する上意下達の「鉄の規律」「軍隊的規律」を、第二インターナショナルと差別化する「前衛党」の要件としていた。

ただし一九二〇年第二回大会「加入条件二一カ条」の段階では、「民主集中制」は、「現在のような厳しい内乱の時期には、党が最も中央集権的に組織され、党内に軍事的規律に近い鉄の規律がおこなわれ、党中央部が全権を持ち、全党員の信頼を得た権能ある権威ある機関である場合にだけ、共産党は自己の責務を果たすことができる」という、戦後「革命的情勢」下の状況の限定が付されていた。それが、世界革命に至らず「資本主義の相対的安定」期に入ったために、「全般的危機」論が必要とされ、各支部＝各国共産党の「ポリシェヴィキ化」が義務づけられた。一九二八年以降の「第三期」、一九三四年以降の「反ファッショ統一戦線」期に入っても、コミンテルンの組織原理と組織

『コミンテルンの世界像』(青木書店、一九九一年) だった。この著作のもとになった名古屋大学『法政論集』連載の先述助手論文と、大部の著作の間には、約一〇年の時間差があった。その間に、いわゆるユーロコミュニズムと、それを根拠づけるネオ・マルクス主義も理論的に成熟し、プロレタリア独裁やレーニン「国家と革命」の呪縛から離れていた。何よりも、ソ連共産党書記長にゴルバチョフが就任し、ペレストロイカ(改革)、グラスノスチ(情報公開)、新思考(階級的課題よりも人類的課題)を提唱するにいたった。

その一環として、東欧「人民民主主義」革命以来の伝統である中東欧社会主義国のソ連邦への軍事的・政治的従属が弱まると、たちまちコミンテルン系譜の共産党政権は、民衆の市民革命によって打倒された。そのまま冷戦崩壊・ソ連解体へと進んだ。東独「ベルリンの壁の開放」やチェコスロヴァキア「ビロード革命」に代表されるこの時代の動きを、私は『国家論のルネサンス』(一九八六年)、『東欧革命と社会主義』(一九九〇年)、『ソ連崩壊と社会主義』(一九九二年)などで論じてきたが、コミンテルンの綱領論争を歴史的に追った『コミンテルンの世界像』は、コミンテルンとマルクス・レーニン主義の世界革命戦略・戦術

構造は「民主集中制」とされ、共産党の加わる統一戦線政府の要件ともされた。この「唯一前衛党」の組織原理が、モスクワのコミンテルン執行委員会と各国支部＝各国共産党の間の関係、各国共産党内部の指導者と一般党员の関係から、共産党と労働組合・農民組合・青年婦人組織等大衆団体との関係にまで導入され、平時にも拡張された。

「民主集中制」は、レーニンがそれを採用したときにはまだ党内討論・異論の自由が残されていたが、スターリン時代には指導者への反対即異端者・裏切り者とするイデオロギー的集権化が進んだ。何よりも、ソ連では社会主義国家の組織原理とされ、憲法にまで書き込まれた。戦後の中東欧社会主義でも、国家原理であると共に、ソ連を中心とした「社会主義共同体」の同盟原理、国有化と集権的計画経済の経済原理にまで拡張された。つまり、コミンテルンを起源とする共産主義は、党としても社会・国家としても「民主集中制」以外の組織原理を持たなかった。たとえは権力分立や指導者統制の論理は否定された。

こうして当初の「世界革命のための革命的情勢下の軍事的共産党」の原理が、一九二〇年代の「ポリシェヴィキ化」の過程で各国支部＝各国共産党レベルでも不満分子・反対派抑圧や「左右の日和見主義」批判の規律強化に用い

られ、一九三〇年代になると、コミンテルン組織の全体が、ソ連邦の外交・安全保障政策に事実上従属するものとなった。「一九三二年テーゼ」の「帝国主義戦争反対」も、あくまで「社会主義の祖国ソ連邦に対する帝国主義の干渉戦争反対」の後衛部隊としての役割だった。

## 6 コミンテルンの軍隊的規律Ⅱ「民主集中制」の歴史的位置

私は、今は消滅した旧東独ドイツ民主共和国での研究と閉塞した社会、教条的文化のなかでの生活で、この組織原理を肌で感じ、根本的疑問を持った。後にそれは、秘密警察シユタージによる監視国家であることを知った。当時は「民主集中制」はマルクスから始まるとされていたから、一九世紀の協同組合社会主義、一八四八年革命時のマルクスらの共産主義者同盟、バクーニンの国際社会民主同盟、それにドイツ社会民主党の組織論を調べた。同時に保守政党を含む各種政党、アナキズムから労働組合、日本のベ平連や市民運動・NPOなど考え得る組織の規約や会則を集めて比較検討した。それらを類型化し、ベルリンの壁開放の頃、『社会主義と組織原理Ⅰ』（一九八九年）という

小さな書物にまとめた。

そこでは、一九世紀ヨーロッパの社会運動の組織の型として、(1) 初期社会主義のなかの、R・オーウエンの「ニュー・ハーモニー準備社会規約」（一八二五年）を典型とする協同組合風「友愛的平等」型、(2) その対極で、一八三九年に武装蜂起に失敗したころのA・ブランキ率いる「四季協会」を典型とし、共産主義者同盟の前身の追放者同盟規約（一八三四―三五）、義人同盟規約（一八三八年、一八四三年）にも見られる「裏切り者は死刑」の秘密結社風「陰謀的集権」型、(3) 「陰謀的集権」の義人同盟にマルクス、エンゲルスが加わった共産主義者同盟の、「黨員間平等」原理と「死刑廃止」を導入した「集権的平等」型（一八四七年創立大会草案、同年第二回大会規約、革命さなかの一八四八年規約、シャッパー派追放後の一八五〇年規約）、(4) ラサール派全ドイツ労働者協会（ADV）一八六三・一八七二年規約の「指導者独裁」を排し、アイゼナハ派社会民主労働党（SDAP）、一八六九年綱領）、ゴータ合同党（社会主義労働者党、SAPD、一八七五年規約）が結社法・社会主義者鎮圧法のもとでも「党内民主主義」を貫くために採用した「契約的分権」型。一八九〇年に合法化して大衆政党・議員政党になるドイツ社

会民主党（SPD）でも、一八九〇年ハレ大会、一九〇〇年マインツ大会規約までは、権力分立・複数指導者制導入や議員権限の強化を伴いつつ実行され、帝国議会選挙での進出を可能にした。一九世紀には、以上四つの型を抽出し、詳しく展開した。

その直後に、東欧革命・ソ連崩壊があり、私はその市民革命の組織原理を「フォーラム・円卓会議」型と、『東欧革命と社会主義』などで特徴づけた。

一九九一年一月に東京で開催された、ローザ・ルクゼンブルク国際シンポジウムでは、一九世紀の四つの型を二〇世紀末の「フォーラム・円卓会議」型までつなぐために、二〇世紀コミンテルン創立前の社会主義運動から見いだした、三つの型を追加して報告した。ここでは特に、ローザ・ルクゼンブルクの晩年の組織論が、インスピレーションを与えた。

二〇世紀初頭のドイツ社会民主党（SPD）には、(5) 一九〇五年のイェナ大会規約以降の「官僚的集権」型への転成を見いだした。ロシア社会民主労働党のレーニンは、このSPDイェナ大会の規約改正を「中央集権化」として歓迎した。逆に、一九〇二年にSPD入党したR・ミヘルスは、この期の体験から一九〇七年にはSPDを離れ、

かの「少数支配の鉄則」をひきだした。「官僚的集権」の特徴は、一九〇九年ライプツィヒ大会、一九一二年ケムニッツ大会改正規約、さらには第一次大戦後の一九一八年ワイマール、一九二五年ハイデルブルク大会規約へと継承され、今日のSPD組織の原型となる。ただし、議会選挙を通じて選挙民の監視を受け、権力分立を認め、国家官僚制とは必ずしも癒着しない点、イデオロギー的統一よりも日常的利害・政策実現を重視し、理論・世界観上は「多元主義」を認める点で、「軍事的集権型Ⅱ民主集中制」とは区別される。

コミンテルンⅡ世界共産党は、(6) 「軍事的集権」型であった。ツァーリ専制下のレーニンのロシア・ポリシェヴィキは、ナロードニキの陰謀秘密結社の伝統とSPDイェナ大会規約の「中央集権化」に学び、ローザ・ルクゼンブルクが「超集権主義」と評した独特の宗派的・軍隊的党組織を形成する。「民主集中制」は、①厳格な「鉄の軍事的規律」の公然たる主張、②上級の決定の下部の無条件実行、③厳しいイデオロギー的・世界観的統一と異論・離反者の犯罪視、④黨員の水平的交通および「分派」禁止、⑤党財政の中央管理と秘密主義、⑥党外大衆組織さらには国家組織への党内「伝導ベルト」を通じての指導と支配の確保、

などに具体化され、コミンテルン「加入条件二一カ条」(一九二〇年)や各国支部「各国共産党用「模範規約」(一九二五年)で完成する。これをもとに、コミンテルン傘下の共産主義者は、出身国の共産党ではなく、居住国の支部「共産党に属するとされた(党籍属地主義、一九二八年第六回世界大会規約)。これが一九世紀の「万国の労働者、団結せよ」の二〇世紀的形態とみなされた。

## 7 ドイツ共産党結党時のローザの遺言 ——「連合的分権」型の意義

しかし、一九一九年三月のコミンテルン創設時には、ドイツの共産主義者の中に別の党組織構想があり、それが創立大会でのKPD代表エーベルライン「棄権」の一因となった。それは、(7)「連合的分権」型で、ローザ・ルクセンブルクの構想した共産主義の党組織であった。一九一八年末のKPD創設期にその秘密を探ると、それは、一九一九年のKPD第二回大会規約に表現されている。

第一に、ローザは、「ロシア社会民主党の組織問題」のなかで、ラサール派ADAVの「独裁」「極端な中央集権主義」とアイゼナハ派SDAPの「自治主義」を対比し、

SDAPの「自治主義」が「労働者階級の偉大なイニシアティブの精神を広範な層に浸透させた」ことを評価していた。「分権主義」には反対し「中央集権主義」一般は否定しなかったが、レーニンの「超集権主義」をラサール派「指導者独裁」になぞらえて批判した。

第二に、ローザは、独立社会民主党(USPD)内のスパルタクス・ブント活動で「批判と独自活動の完全な自由」を経験し、一九一八年末のKPD創立にあたっては、「東方の革命家と西ヨーロッパの社会主義者を結ぶ」ために「共産党」ではなく「社会党」の党名を主張した(三対四で敗北)。新インタナショナル結成にも、慎重な考えをもっていた。

第三に、創立大会で彼女は党綱領を報告し、エーベルラインが組織問題を報告したが、この両者は一対のもので、エーベルライン報告はローザの党組織論を表現していると考えられる。たしかに彼女は、虐殺される直前にも「ドイツは昔から組織の古典的国だ」と「組織フェティシズム」を批判し「行動へ！」を訴えたが、その行動のために必要最小限の「底辺からの」組織のあり方は、エーベルライン報告に示された。それは、①官僚的選挙同盟ではなく経営中心の政治的行動組織、②経営・住区組織の「完全な自立

性」、③中央指導部の任務は「精神的政治的指導の総括」に限る、④地方機関紙を中央が規制してはならない、⑤規約は短文・簡潔で地方組織の最大限の自由を保証する、など「分権・自治」的であり、かつ党自体は自立的経営・住区組織の「連合」として構想するものであった。

第四に、KPD創立大会では規約案文はなく、ローザとカール・リープクネヒトの悲劇的虐殺の後、一九一九年春に草案が起草され、六月の第一回全国協議会で討論・採択、一〇月の第二回大会で承認され発効した。したがって、この一九一九年KPD規約にローザは直接関わりえなかつたが、その内容からして、ローザの党思想を反映したものと考えることができる。

その特徴は、次の通りである。①前文なしでわずか八カ条から成る、極めて短く簡潔な規約である(SDAPと近似)。②地方組織は「党の原理と党決議の範囲内で自立的」で「独自規約」制定権をもつ。③地方組織は選挙区単位(SPD型)でなく経営中心で下から組織される。④党大会は完全比例代表制で、最低年一回開かれる(SPD内の左派の主張の実現)。⑤党大会で選ばれる中央委員会への統制監督機関は特に設けないが選挙・リコール制を徹底し、各中央委員(女性・青年代表含む)は完全に同権で、

相互に監視しあう。⑥党費中央納入は一〇%で、当時のSPD二五%、USPD二〇%より低い。⑦地方機関紙は独立であり、中央委員会は編集権に介入できず反論権のみ。⑧各級有給専従職員(書記・機関紙部・宣伝部・党務部)用の執務規約を明示していた(ドイツ的伝統)。

しかしこの間、一九一九年三月に、ローザの遺志をついだKPD代表(エーベルライン)の反対(最終的には棄権)にもかかわらず、レーニン、ジノヴィエフらの強引な指導により第三インター「コミンテルン」が結成され、KPDはそこにくみこまれた。一九二〇年八月のコミンテルン加入条件「二一カ条」採択と、二月のUSPDのKPDへの合流により、一九二〇年規約が作成された。ここでは、「決定の実行」を「党員の義務」とし、すべての党新聞の中央による監督、議会フラクシオンや党費中央上納三〇%が規定され、中央集権化した。それでもこの規約には、上級の承認による独自規約制定権や、USPDから継承した複数議長制、除名処分者の異議申し立て・仲裁裁判などの「ドイツ的伝統」が残されていた。

翌一九二一年のKPDイェナ大会規約で、「二一カ条」で義務とされた「民主集中制」は「最も厳格な中央集権制」「軍事的規律」が、ドイツ労働運動史上初めて、明記



された。複数議長制が廃止されて政治局・組織局が設けられ、新たに「規律」の章が入り、「KPDは中央集権的党組織であり、自己の隊列内では厳格な規律を保たなければならない。組織とその指導部の決定は無条件に実行されなければならない」と規定された。ここに、KPDは、組織原理上は、完全にローザの「連合的分権」型から離れる。

さらに、一九二三年の十月闘争敗北の教訓として、「分派や潮流やグループの存在を許さない中央集権的な党」「単一の魂から鑄られた一枚岩の党」の欠如が指摘された。「ドイツの教訓」に基づき「ルクセンブルク主義」は「トロツキズム」とともに批判され、世界のほとんどの支部＝共産党が「コミンテルン模範規約」（一九二五年）にそった組織を強制される。KPDではそれが、一九二五年規約となる。ローザの危惧した「早すぎたインターナショナル結成」により、KPDは、こうしてドイツ労働者政党的長い組織的伝統から完全に遊離し、「ポリシェヴィキ化＝軍事的集権化」を完成する。「すべてを万人のために」の初心と主体性、献身と自己犠牲が、「すべてを党と指導者のために」へと変換され、物神化される。

こうして私は、コミンテルンとその後の後継組織、各国共産党とコミンフォルム・国際共産主義運動における「コ

ミンテルンの伝統」とは、プロレタリア独裁の承認や階級闘争至上主義よりも、むしろ党独裁・指導者独裁を可能にする組織原理＝「民主集中制」こそ核心ではないか、と考えた。いわゆるユーロコミュニズムの中でも、イタリア共産党やフランス共産党、イギリス共産党の中から「民主集中制ではなく民主主義を」という主張が生まれていた。中東欧社会主義国の中では、共産党独裁に対抗する新しい組織原理の社会運動が、一九六八年「プラハの春」の頃から自生的に生まれ、労働・宗教・文化・芸術・スポーツなど多様な分野の反対派をまきこんで、「連帯」「フォーラム」「円卓会議」など諸個人の水平的結合と分権・自治をもとにした社会運動が、市民革命の原動力になった。それは、コミンテルンも一九世紀以来のインターナショナル運動をも超えるものであった。

二一世紀の変わり目から、反グローバルイズム運動、反戦平和運動、環境・気候変動についての社会運動に、ローザ・ルクセンブルクが萌芽的に提示し、さまざまな社会運動の中で無自覚的に採られてきた「連合的分権」型の組織が生まれていた。例えばネグリ＝ハートが「もう一つの世界は可能だ」と希望を託した「世界社会フォーラム（WSF）」は、政党も労働組合も市民運動も「差異の解放」「対

等の連鎖」を尊重して平等に加わり、「さまざまな運動のもとづくひとつの運動」「多様なネットワークによるひとつのネットワーク」というネットワーク型組織を特徴とした。私自身のコミンテルンの批判的検討と新しい社会運動の模索は、日本共産党「創立記念日」についての個別研究や反原発運動の軌跡を探りながらも、多様性を前提に一つにまとまる「世界社会フォーラム」型社会運動の組織原理の日本への紹介で、基本的に完了した<sup>15)</sup>。

## 8 旧ソ連秘密文書公開後の世界と日本の「コミンテルン」研究

一九八九年東欧革命・九一年ソ連解体で、私が批判的分析の主たる対象としてきたヨーロッパのコミンテルン型共産党は崩壊・解体し、多くの共産主義者は第二インターナショナルに起源を持つ社会民主党・労働党等に復帰した（現欧州議会では社会民主進歩同盟）。「民主集中制」への私なりの批判・相対化にもとづいて『コミンテルンの世界像』で予告した『コミンテルンの日本像』、および二〇世紀後半のドイツ社会民主党等社会主義インターナショナルからイギリス労働党と労働組合の関係、スペインの生産者

労働組合から日本のベ平連、ドイツの緑の党等に及ぶはずであった『社会主義と組織原理 II』は、公刊しないことにした。「コミンテルンの伝統」という批判対象そのものの衰退・消滅で執筆意欲を失ったこと、日本共産党がソ連・東欧型から一応決別しながらも「東アジア型」として生き残り、「民主集中制」だけは死守しようと私や藤井一行教授らを公然と政治的に批判してきたことが学術研究にとって煩わしかったことも、その一因だった<sup>16)</sup>。

だが、それ以上に大きかったのは、ソ連崩壊に前後して旧ソ連共産党中央委員会マルクス・レーニン主義研究所が所蔵してきた膨大なコミンテルン秘密文書が閲覧可能になり、公式記録・機関紙誌や大会議事録・決議決定集ではうかがい知れなかったコミンテルンと各国共産党の内実、とりわけ幹部人事や党財政、「民主集中制」運用の実態を、具体的に知ることができるようになったことであった。一九七〇年代から気がかりだった国崎定洞のスターリン粛清の真相から調べ始め、当時の在露日本人約一〇〇人の行方をひとりひとり第一資料から追って『モスクワで肅清された日本人』『人間 国崎定洞』『国境を越えるユートピア』の三部作をまとめ、最終的には『ワイマール期ベルリンの日本人』という研究書にまとめた<sup>17)</sup>。

一九九〇年代にはモスクワに通って公文書館で資料請求し閲覧したが、未公開だった秘密資料はたちまち世界に拡散し、特にアメリカでは、ソ連崩壊で失職した旧ソ連ML研コミンテルン文書館のフィルソフら文書解読の専門家まで財力を使って自国に招聘し、次々と資料集・研究書を出すようになった。そのなかで邦訳された『アメリカ共産党とコミンテルン』『ヴェノナ』などネオ・マッカーシズム風コミンテルン研究をもとにして、日本でも江崎道明らの新反共主義<sup>18</sup>日本会議風コミンテルン史観・陰謀論が跋扈し始めた。

かつてコミンテルン及び国際共産主義運動の西側研究所の宝庫であった米国スタンフォード大学フーバー研究所の『国際共産主義事情年鑑』(Yearbook on International Communist Affair 1966-91)は、対抗してきたソ連・東独ML研の崩壊に合わせ、一九九一年版を最後に廃刊になった。それに代わって、一九九三年からドイツ・マンハイム大学のヘルマン・ヴェーバー教授らの始めた学術的な『歴史的共産主義研究年鑑』(Jahrbuch für Historische Kommunismusforschung, JHK 1993-)が、モスクワから流出したコミンテルン秘密資料を用いた世界の新研究の交流の場となった。出版元をすでに三社も換えて出版は続

いているようであるが、かつて寄稿したこともある私の主たる活用は、インターネット上のJHKサイトに移った。インターネット上には、Comintern Electric Archivesが一時的に生まれしたが、今日では大英図書館のCommunist International (Comintern) Archives Project & Marxists Internet Archive 中のHistory of The Communist International 1919-1943<sup>19</sup> それに各地域・各国ごとの資料集や研究についてのニュースレターやメーリングリストが作られ、ウェブ上で検索され、研究交流できるようになった。つまり「情報戦の時代」である二一世紀には、コミンテルン研究の基礎条件が大きく変わった。

モスクワのロシア国立社会政治史文書館(ルガスピRGASPI)に集積されていたコミンテルンの日本問題資料(Comintern Archives: Files of Communist Party of Japan)も、国会図書館憲政資料室ほかいくつかの大学図書館で見ることができるようになった。その主要文献を編纂した富田武・和田春樹編訳『コミンテルンと日本共産党』も刊行された。

ソ連崩壊前後から、コミンテルンと各国支部<sup>20</sup>各国共産党の新資料公開・交信記録発掘が、日本でも新しいコミンテルン研究の土台となった。山内昭人による初期コミンテ

ルンのアジアでの共産党成立過程の研究、栗原浩英のインドシナ共産党を素材とした「コミンテルン・システム」の研究、鬼丸武士のヌーラン事件と東南アジア共産党ネットワークの研究、島田顕のデイトロフ文書等の読み直しとスペイン内戦研究、等々である。東アジアについても、石川禎浩・田中仁らの中国共産党史研究、水野直樹の朝鮮共産党研究や鄭榮桓の在日朝鮮人共産主義運動史、それに児嶋俊郎の日本共産党満州地方事務局の先駆的研究も現れた。<sup>21</sup> 自身は、ソ連在住日本人の粛清研究の延長上で、国崎定洞・千田是也らのドイツ共産党日本人部、健物貞一・鬼頭銀一・ジョー小出・宮城与徳らの米国共産党日本人部、東亜同文書院や満鉄関係者も加わりゾルゲ事件も関係する中国共産党日本人部、それに国場幸太郎らの占領期沖繩非合法共産党研究などにたずさわった。<sup>22</sup> さらに、ロシア史・ソ連史研究の延長上での富田武の日ソ戦・シベリア抑留研究や下斗米伸夫のアジア冷戦史研究も「コミンテルン一〇〇年」に関連する。<sup>23</sup>

## 9 黒川伊織『戦争・革命の東アジアと日本の「コミュニスト」の画期的

そんな新しい二一世紀型の研究の中で、今後のコミンテルン型共産主義の研究に大きな意味があると思われる、三つの文献をとりあげて、私の半世紀の研究歴からの期待と希望をのべておこう。いずれも、コロナ禍で自粛・自宅塾居を強いられ、この間続けてきた七三一部隊研究の流れから『パンデミックの政治学——「日本モデル」の失敗』(花伝社、二〇二〇年)を執筆しながら、閉塞状況とポスト・コロナ期の社会運動・民衆運動について考え見出した、若い世代の刺激的な労作である。

コミンテルンとの直接の関係で、また本誌の特集との関係で特筆すべき第一は、黒川伊織の新作『戦争・革命の東アジアと日本のコミュニスト 1920-70』(有志舎)である。黒川の前著『帝国に抗する社会運動——第一次日本共産党の思想と行動』は、世界政党コミンテルンの呼びかけに応じて作られた日本支部<sup>24</sup>第一次共産党についての、旧ソ連機密解除資料や中国・朝鮮共産主義者との関係を踏まえた、画期的研究であった。正統派の通説であった村田陽一・犬丸義一らの日本共産党創設期の研究も、モスクワの新資料にもとづき犬丸に異議を唱えた私自身の研究も、黒川の緻密で実証的な研究によって乗り越えられた。<sup>25</sup> その延長上での新著は、「東アジア共産主義」のスケールでの、画期的

労作である。

黒川の新著は、前著の「帝国に抗する」コミュニズムという視点をさらに深化し、一九二〇年代初頭の各国支部結成期のみならず、コミンテルンの指令・指示をこえて、東アジアの共産主義者たちが相互に交流し、時には対立しながらも協力していく姿を、一九三〇年代から五〇年代まで、丹念に追いかける。そのさい、「これまで共産党を議論する際に重視されてきたのは、『32年テーゼ』や戦後の『51年綱領』あるいは『党章草案』といった綱領的文書であり、日本の革命戦略と連動した現状認識はいかに変化してきたかという点であった。しかし、私は、日本の変革の向こうに東アジアの変革を構想して生きた有名無名の人びとの歩みを知り、そのような人びとの肉声にこそ耳を澄ませたいと願う」として、新たな史実やエピソードをふんだんに盛り込んでいる。

コミンテルンとの関わりでは、その「一国一党の原則」<sup>11</sup> 党籍属地主義を「世界各地のコミュニストが各々の暮らす地で民族の壁を乗り越えて革命という共通の目的のもと結集するために提起された原則」と捉え直し、例えば在日中国人留學生の活動、中野重治「雨の降る品川駅」に象徴的な朝鮮人労働者と日本共産党員の交流などで、東アジア

では積極的意味を持ったという。その人間的繋がりの実例の発掘や、「日本人対植民地人」の緊張を孕んだ内的関係性への目配りは、すぐれたものである。そのことを通じて「日本のコミュニストの歴史的経験を、日本共産党史の一次的・党史的性格から解放して東アジア史と連関した日本近現代史へと接合する」と述べている点には、大いに共感できる。

私自身の研究でいえば、『ワイマール期ベルリンの日本人』に仕上げたドイツ共産党日本人部の研究では、ヒトラー・ナチズムの台頭期にドイツ共産党内部の日本人・ドイツ人・中国人・朝鮮人・インド人が満州事変に始まるアジアの戦争に反対して「革命的アジア人協会」をつくり共闘した経験が、黒川の発掘した東アジアでの経験と共通する。ただしそれに加わった人びとが、ソ連に亡命して遭遇した「日本のスパイ」という汚名での銃殺・強制収容所（ラーゲル）送りには、やはり「軍事的規律」民主集中制」の影を見出さざるを得なかった。

一九三〇年代後半、ソ連にはナチスに追われたドイツ共産党員をはじめ、世界中から多くの国の亡命共産党員が入っていたが、「一国一党」の属地主義は、平等ではなかった。スターリンに忠実な幹部党員は転籍してソ連共産党籍

を得たが、多くの一般党員はソ連共産党の入党審査に適合できず、「党籍なきボリシェヴィキ」となった。日本では共産党員ではなくドイツ共産党に入党して亡命した国崎定洞や、アメリカ共産党経由、樺太・ウラジオストク経由でソ連に入った日本人らは、野坂参三のような公式指導者を除き、ほとんどソ連共産党員になれなかった。そして、そのまま「日本のスパイ」として、ソ連刑法五八条「反革命罪」にもとづき、犯罪人とされ処刑された。また、アメリカ共産党の移民系党員の場合は、まさにその属地主義故に、偽造パスポートや信任状を持って出身国に出入りし、コミンテルン国際連絡部（OMS）を介したソ連とコミンテルンの国際的諜報活動に利用されざるをえなかった。ゾルゲ事件の宮城与徳は、その一人であった。

コミンテルンの時代の「プロレタリア国際主義」は、共産主義者の独占するものではなかった。別のつながり方もあった。戦時中の北欧諸国には、ナチスに抵抗する多くの欧米社会民主主義者が、ドイツやオーストリアなどナチスの占領地域から亡命していた。中立国スウェーデン社会民主労働党のミユルダール夫妻らは、彼らを仲間として「クライネ（小）インテルナツィオナーレ」をストックホルムに組織していた。ここでは、それぞれの国の戦後と社会民

主義・労働運動の国際連帯の構想が相互に交流され、自由に議論されていた。そこから、戦後西ドイツ首相となるワイリ・ブランド、オーストリア首相となるブルーノ・クライスキーをはじめ、ノーベル賞受賞者三人を含む戦後の指導者たちが生まれたが、その他にも無数の無名の人びとが加わっていた。その詳しい記録は今日、ボンのドイツ社会民主党文書館で、自由に見ることができ<sup>12</sup>る。二一世紀の「国際主義」は、インターネットやSNSをも使って、より自由で多様な形態になる。

## 10 藤野裕子、斎藤幸平らに刺激されて「コミンテルン」を再考する

このことは、第二にとりあげる藤野裕子『民衆暴力——一揆・暴動・虐殺の日本近代』（中公新書）の提起する問題と関連する。藤野は、前著『都市と暴動の民衆史』以来、日比谷焼き打ち事件から関東大震災時の朝鮮人虐殺にいたる「民衆暴力」参加者の動機と行動の多様性に注目していた。新著では、これを近世百姓一揆や明治維新の新政反対一揆にまで遡って、「人びとを暴力行使に駆り立てたのは、いったい何なのだろうか」「権力に対する民衆の暴力と、



被差別者に向けた民衆の暴力とが、それほど簡単に切り分けられない」と問題提起した。<sup>26)</sup>

無論、コミンテルンへの直接の言及はない。だが、関東大震災では、朝鮮人・中国人ばかりでなく、社会主義者・共産主義者・無政府主義者も、憲兵隊や警察、さらには民衆の自警団に襲われる対象となった。大杉栄虐殺・亀戸事件のほか、第一次共産党事件の被告・堺利彦は刑務所の中で看守長に襲われ、刑務所長の機転で一命をとりとめた。実際、震災の報を受けて「革命的危機」を見いだしたコミンテルン執行委員会の日本支部<sup>27)</sup>日本共産党への指令には、「現存体制の打倒」<sup>28)</sup>「震災を革命へ」の非常時内乱扇動が含まれていた。実際の獄外非法法党にはそのような力はなく、第一次共産党の解党につながったのであるが。

コミンテルンが、「戦争を革命へ」のロシア革命から生まれて世界革命を最終目標とし、「軍隊的規律」として「民主集中制」を採用したことは、国家権力を「暴力装置」とみなし、それに対抗する「革命的暴力」を組織し、先進国はもろろんのこと、植民地・半植民地でも武力革命を不可避と考えていたことと、不可分であった。一九世紀ブランキ派の「裏切り者は死刑」の陰謀秘密結社の伝統は、組織内部の原理として継承されており、革命後の権力を握っ

た国家では、異論者を犯罪者と見なす専制支配に拡張された。

もともとコミンテルンの「前衛党」には、戦争反対や生活防衛、労働者の不満やルサンチマンを「管理・統制」して領導する役割が期待されていた。いわゆる大衆団体への「伝導ベルト」理論は、その表現だった。日本共産党六年綱領の「敵の出方」論も、学生運動の中の「正当防衛権」も、「革命的暴力」の延長上で展開されたものだった。インドのガンジーの非暴力抵抗や、アメリカ・キング牧師らの公民権運動は、コミンテルンの伝統を超えるものであった。個人の自由や人権は、組織の「使命」に従属するものであった。

しかし、藤野の日本近代史での実証を待つまでもなく、フランス革命以来の既存国家権力に対する民衆の抵抗・反乱・暴動には、個人テロや略奪・爆破・性暴力など、さまざまな逸脱行動は避けられなかった。「プロレタリア独裁」は「階級敵に対する」暴力を肯定した上で、樹立した新権力が暴力を「管理」し独占することが前提されていた。コミンテルンの「民主集中制」は、逸脱行動ばかりでなく、異論の抑圧や排除にも、査問・リンチなどの「階級裁判」を暗黙の前提とした。それが、新権力の国家・社会原理に

まで拡張されると、憲法・刑法・安全保障政策にも公然と書き込まれ、崩壊したソ連国家はもろろん、東独のシュタージ、それに今日の中国・北朝鮮のような公安・秘密警察国家を産み出すことになった。

日本で長く共産党が「恐ろしい」「暴力革命の党」と象される根底には、無論、権力の側からの治安維持法・レッドパージから公安警察・機密保護法制にいたる「反共宣伝」があるが、一九三〇年代の銀行強盗事件・党内スパイ摘発、シベリア抑留「民主化運動」の吊上げ、一九五〇年代の警察署襲撃・警官射殺や中核自衛隊・山村工作隊等々についての「民衆の集会的記憶」が作用し残されていることは、否定できない。さらに、六八―六九年学生運動の「ゲバ棒」「内ゲバ」や連合赤軍事件が「共産主義の暴力」をイメージさせる限りで、「民主集中制」に媒介されたコミンテルンの伝統が、情報戦の中で利用される。

たとえ二一世紀の現実政治のなかで格差や差別に反対する運動の先頭に立ち、戦争や暴力に反対する「平和革命」の立場を繰り返し言明しても、この「暴力容認」イメージは、コミンテルン支部として出発し共産党・共産主義者と名乗り続けることにつきまとう宿痾のようなものである。民衆の多様で不定型な不安や恐怖、不平不満や憤怒にもと

づく逸脱行動や暴力衝動を、はたして政党は「管理」できるのか――これは、コロナ禍日本での感染者差別・「自粛警察」や二〇二〇年アメリカ大統領選挙においても問われた、政党政治・社会運動の根源的な問いである。現代日本の社会運動内における性暴力の問題にも、つながるかもしれない。<sup>29)</sup>

この点からすると、黒川伊織が新著の中で、「帝国の共産党」の歴史を「戦争と革命」の時代と「平和的共存」の時代の循環として描いているのには、やや違和感を覚えた。前者が一九一七―二二年、二八―三四年、四七―五三年、六一―六六年、後者が一九二二―二八年、三四―四七年、五三―六一年、六七年以降で、対内的と対外的を分けたりしているが、コミンテルン及び国際共産主義運動の歴史的展開、それに社会民主主義・民族解放運動等他潮流との関係を重ね合わせると、強引に見える。コミンテルンの世界認識の第一矛盾<sup>30)</sup>「体制間矛盾」を基準にしても、例えば第二期（一九二二―二八年）は、「資本主義の部分的・相対的安定」の時期であり、ヨーロッパにおける初期統一戦線の敗北を教訓として「ボリシェヴィキ化」が強引に進められ、国際連盟風の「ブルジョア平和主義」は厳しく批判された。確かに中国の第一次国共合作はあったが、戦後フ

ルシチョフ以降の「平和的共存」とは、異質のものだった。第四期（一九三四―四七年）も、反ファシズム連合国にソ連が加わっていたが、中東欧共産党にとっては「戦争から革命へ」の一時代であった。そのソ連では「社会主義国家内での階級闘争」として、スターリンの大量粛清が進められた。この点は、東アジア共産主義に即した、独自の指標の設定と時期区分の方がよかったと思われる。

おそらく問題は、コミンテルンの「平和」および「革命」の捉え方である。しかもそれは、マルクス・レーニン主義の唯物史観という体系的イデオロギーによって基礎づけられていた。その解釈が時々の党幹部により独占され、異なる理解が抑圧ないし周辺化されるのも、コミンテルン型「民主集中制」のイデオロギー統制の所産なのである。現代中国では、「習近平の二一世紀マルクス主義」が支配し高唱される中で、若い大学生たちが「マルクス主義研究会」を作り、工場労働者の労働実態を知り争議を支援して「中国は果たして社会主義なのか」を問い直す動きが生まれたが、たちまち弾圧され、行方不明者も出ている。これを日本語で報じたのが、日本のメディアではなく、韓国ハングョレ新聞であったことは、今日の東アジアでの社会運動の布置状況を反映している。<sup>28)</sup>

ここに、第三にとりあげる斎藤幸平の『人新世の「資本論」』（集英社新書）が関わり、風穴を開ける。斎藤は、前著『大洪水の前に』やマルクス・ガブリエルらとの共著『資本主義の終わりか、人類の終焉か』で、新MEGAの後期マルクスの思想を手がかりに、資本主義のもたらす自然・生態系破壊、物質代謝の攪乱を問題にし、「エコ社会主義」を主張してきた。コミンテルンはもちろん登場しないが、ソ連型マルクス・レーニン主義の核心に、マルクスの一面的解釈から導かれた「生産力至上主義」を見いだしている。<sup>29)</sup>

実は私自身、福島原発事故後に書いた『日本の社会主義——原爆反対・原発推進の論理』で、原子力に対する共産党・社会党・原水禁運動の歴史的言説に見出したのは、レーニンの「共産主義とはソヴェト権力プラス全国の電化」や一九二八年コミンテルン「世界綱領」に典型的な、ロシア革命以来の「生産力主義」の残滓であった。人類が自然力と闘い「生産力の限りないめらかな急速な上昇にもとづく経済の円滑な発展」をもたらしつつこそ、コミンテルンのめざす世界革命の究極の目標で、私は「階級的近代化論」と名付けた。それは、講座派・労働派・宇野理論など日本マルクス主義に共通する暗黙の了解で、そのユートピ

アが「労働者の祖国」ソ連への憧れや「搾取・貧困・差別からの解放」を願う人びとの、共産主義への共感を産み出した。二〇世紀社会主義・共産主義運動の全体、個々の国におけるコミンテルン支部<sup>30)</sup>各国共産党は、その「生産力至上主義」の呪縛と誘惑から逃れ得なかった。「戦争と革命の時代」の「革命」のめざしたものは、生産関係の変革による「自然の征服」「無限の生産力の解放」だった。その運動に、人類の数億の人びと、日本でも一〇〇万人以上の人びとが、一時的にせよ加わり、時には生命を捧げた。

斎藤幸平の新著は、そうした二〇世紀社会主義・コミンテルン型共産主義を相対化し脱構築する、好個な解毒剤である。気候変動に対する世界の社会運動と「帝國的な生活様式」批判を手がかりに、「気候ケインズ主義」を超え「使用価値の復権」「脱成長コミュニズム」「ラディカルな潤沢さ」を主張し、地域政党・協同組合による参加型社会、国境を越える自治体主義に希望を託する。黒川の視角とは異なる意味での、もうひとつの「帝国への挑戦」である。

私自身のコミンテルン研究五〇年の回顧から導かれるのも、こうした若い世代に学んだ新たな「コミュニズム」「ソーシャリズム」理念の必要と、それにふさわしい組織原理・運動様式に立脚する社会運動の再構築である。「革

命歌』で言えば、一九世紀の「ラ・マルセイエーズ」から二〇世紀の「インターナショナル」を経て、二一世紀は「イマジン」である。学術的コミンテルン研究の課題として言えば、東アジアでは細かい伝統であった初期社会主義の流れ、一九世紀西欧の初期社会主義諸潮流と国際連帯、協同組合主義・サンデイカリズム・アナキズムを含む脱資本主義運動総体のなかに「コミンテルンの二〇〇年」を位置づけ再検証することが、意味を持つであろう。

注

- (1) 加藤哲郎『バンデミックの政治学——「日本モデル」の失敗』花伝社、二〇二〇年、参照。
- (2) 加藤『日本の社会主義——原爆反対・原発推進の論理』第一章、岩波書店、二〇一三年。
- (3) 「ロシア史上最恐の疫病」Russia Beyond <https://jp.rhth.com/history/83017-foshia-shijo-saikyo-no-ekibyō> (二〇二〇年一〇月閲覧、以下同)。
- (4) 曾我豪「スペイン風邪に感染した平民宰相・原敬」『講座』二〇二〇年四月一日 <https://webtronza.asahi.com/politics/articles/2020041000001.html> 「米騒動収束に影響」「スペイン風邪」研究会、成果まとめ刊行「Yahoo Japan ニュース」<https://news.yahoo.co.jp/articles/d6d77e9ae16957a685a786f2523e9193986dd78>

- (5) 加藤『20世紀を超えて——再審される社会主義』二〇〇一年、『情報戦の時代』『情報戦と現代史』二〇〇七年、いずれも花伝社。加藤『体制変革と情報戦——社会民主党宣言から象徴天皇制まで』『岩波講座「帝国」日本の学知』第四卷『メディアのなかの「帝国」』岩波書店、二〇〇六年。
- (6) ケヴィン・マクグー・マクグー&ジェレミ・アグニュー『コミンテルン史』原書一九九六年、萩原直訳、大月書店、一九九八年、ステファヌ・クルトワ他『共産主義黒書』原書一九九七年、外川継男・高橋武智訳、ちくま学芸文庫、二〇一七年。ただし旧ソ連秘密文書による各種資料集は世界中で出ている。
- (7) 加藤『世界政党と政策転換』名古屋大学『法政論集』78-79号、一九七九年、および『コミンテルンの綱領問題』『法政論集』80-83号、一九七九-八〇年。
- (8) 加藤『32年テーゼの周辺と射程——コミンテルンの中途革命論』上下、『思想』693・694号、一九八二年三月四月。
- (9) 加藤『現代世界認識の構図』『唯物論研究』4号、一九八一年五月、後に『国家論のルネサンス』青木書店、一九八五年、所収。
- (10) この時期の問題については、インタビュー一九七〇年代『エピソードとなった「序説」への研究序説——「スターリン問題研究序説」と70年代後期の思潮』（中部大学年報『アリーナ』第16号、二〇一三年）で、小島亮らとの対話で、質問に詳しく答えておいた。

- (11) この点は、加藤『20世紀社会主義・革命運動史を21世紀にどう描くか——河西英通著『社共合同』の時代』に寄せて（法政大学『大原社会問題研究所雑誌』七三七号、二〇二〇年三月）で述べておいた。コミンテルンの解散そのものが、連合国内でのソ連の戦時戦略の一部であった。加藤『連合国の戦後アジア構想』、『岩波講座 東アジア現代通史』第六卷『アジア太平洋戦争と「大東亜共栄圏」1935-45年』岩波書店、二〇一一年。
- (12) 加藤『コミンテルンの世界像——世界政党の政治学的研究』青木書店、一九九一年。
- (13) 加藤『社会主義と組織原理 I』窓社、一九八九年。この本は少数数発行で、その後絶版になった。
- (14) 原文はドイツ語で、日本語では加藤『ローザ・ルクセンブルクの構想した党組織』として『ソ連崩壊と社会主義』（花伝社、一九九二年）に「補論」として収録した。
- (15) 加藤『反ダボス会議のグローバルリズム』『エコノミスト』二〇〇三年五月一三日号、フィッシュャー・ポニア編集、ネグリ・ハート序文、加藤監訳『もうひとつの世界は可能だ！(Another World Is Possible)』日本経済評論社、二〇〇三年。加藤前掲『情報戦の時代』『情報戦と現代史』、加藤哲郎・伊藤晃・井上學編著『社会運動の昭和史——語られざる深層』白順社、二〇〇六年。
- (16) この点は、松岡英夫・有田芳生編『日本共産党への手紙』（教育史料出版会、一九九〇年）への私や藤井一行の寄稿、

- および中部大学『アリーナ』第20号、二〇一七年二月に加藤が編集した藤井一行遺稿集『コミンテルンと日本人 肅清』、加藤『米共産党日本人部研究序説』、参照。
- (17) 『モスクワで肅清された日本人——30年代共産党と国崎定洞・山本懸蔵の悲劇』青木書店、一九九四年、『人間国崎定洞』（川上武と共著）、勁草書房、一九九五年、『国境を越えるユートピア——国民国家のエルゴロジ』平凡社ライブラリー、二〇〇二年、『ワイマール期ベルリンの日本人——洋行知識人の反帝ネットワーク』岩波書店、二〇〇八年。
- (18) クレア・ファイルソフ・ヘインズ編『アメリカ共産党とコミンテルン』五月書房、二〇〇〇年、クレア・ヘインズ編『ヴェノナ』扶桑社、二〇一九年、江崎道明『コミンテルンの謀略と日本の敗戦』PHD研究所、二〇一七年、同『日本外務省はソ連の対米工作を知っていた』育鵬社、二〇二〇年、など。
- (19) 富田武・和田春樹編訳『資料集 コミンテルンと日本共産党』岩波書店、二〇一四年。
- (20) 山内昭人『リウトヘルスとインタナショナル史研究 片山潜・ボリシェヴィキ・アメリカレフトウィング』ミネルヴァ書房、一九九六年、同『初期コミンテルンと在外日本人社会主義者——越境するネットワーク』ミネルヴァ書房二〇〇九年、同『戦争と平和、そして革命の時代のインタナショナル』九州大学出版会、二〇一六年。栗原浩英『コ

- ミンテルン・システムとインドシナ共産党』東京大学出版会、二〇〇五年、鬼丸武士『上海「ヌーラン事件」の闇——戦間期アジアにおける地下活動のネットワークとイギリス政治情報警察』書籍工房早山、二〇一四年、島田顕『ソ連・コミンテルンとスペイン内戦——モスクワを中心にしたソ連とコミンテルンのスペイン内戦介入政策の全体像』れんが書房新社、二〇一一年、同『コミンテルンが描いたユートピア——スペイン人民戦線政府・共和国論』図書新聞社、二〇一二年。
- (21) 『初期コミンテルンと東アジア』研究会編著『初期コミンテルンと東アジア』不二出版、二〇〇七年、石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店、二〇〇一年、田中仁『1930年代中国政治史研究』勁草書房、二〇〇二年、鄭栄桓『朝鮮独立への隘路——在日朝鮮人の解放五年史』法政大学出版会、二〇一三年、兒嶋俊郎『日本人共産主義者の闘い——日本共産党満洲地方事務局』荻野富士夫・兒嶋俊郎・江田憲治・松村高夫『満洲国』における抵抗と弾圧』日本経済評論社、二〇一七年、など。
- (22) これまで注記してきたもののほか、加藤・鳥山・森・国場編『戦後初期沖繩解放運動資料集』全三巻、不二出版、二〇〇四-二〇〇五年、加藤『ゾルゲ事件』平凡社新書、二〇一三年、など。
- (23) 富田武の『スターリニズムの統治構造——一九三〇年代ソ連の政策決定と国民統合』岩波書店、一九九六年、同



- 『戦間期の日ソ関係——1917—1937』岩波書店、二〇一〇年、同『シベリア抑留者たちの戦後——冷戦下の世論と運動 1945—56年』人文書院、二〇一三年、『シベリア抑留——スターリン独裁下、「収容所群島」の実像』中公新書、二〇一六年、『シベリア抑留者への鎮魂歌（レクイエム）』人文書院、二〇一九年、『日ソ戦争 1945年8月』みず書房、二〇二〇年、など。下斗米伸夫の『アジア冷戦史』中公新書、二〇〇四年、『モスクワと金日成——冷戦中の北朝鮮 1945—1961年』岩波書店、二〇〇六年、『日本冷戦史——帝国の崩壊から55年体制へ』岩波書店、二〇一一年、など。
- (24) 黒川伊織『戦争・革命の東アジアと日本のコミュニスト 1920—70』有志舎、二〇二〇年、同『帝国に抗する社会運動——第一次日本共産党の思想と行動』有志舎、二〇一四年。
- (25) 加藤「社会民主主義の国際連帯と生命力——1944年ストックホルムの記録から」田中浩編『リベラル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー』未来社、二〇一三年、所収。Willy Brandt, Links und Frei, Hofman und Campe, 1982; Klaus Misgeld, Internationale Gruppe demokratischer Sozialisten in Stockholm 1942-1945, Bonn-Bad Godesberg, Verlag Neue Gesellschaft, 1976。私の崎村茂樹研究は、そこに加わった元東大農学部講師・在独日本大使館嘱託であった唯一の日本人についてのものである。
- 加藤「情報戦のなかの『亡命』知識人——国崎定洞から崎村茂樹まで」20世紀メディア研究所『インテリジェンス』誌第九号、二〇〇七年一月、参照。
- (26) 藤野裕子『都市と暴動の民衆史 東京・1905—1923年』有志舎、二〇一五年、同『民衆暴力——一揆・暴動・虐殺の日本近代』中公新書、二〇二〇年。
- (27) 加藤『日本の社会主義』第二章。
- (28) 「女性を踏み台にするデモはいらない」社会運動内部での性暴力に抗議相次ぐ「毎日新聞二〇二〇年一月八日。小山エミ「ウォール街占拠」運動における『運動内運動』——性暴力、ホームレス非難、ホモフォビアをめぐる」Synodos 二〇一一年一月二三日。
- (29) 中国左派学生の間々、「中国は果たして社会主義なのか」『ハンギョレ』新聞、二〇二〇年一〇月二八日 <http://japanhancok.kr/arti/international/38140.html>
- (30) 斎藤幸平『大洪水の前に——マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版、二〇一九年、同『人新世の「資本論」』集英社新書、二〇二〇年。マルクス・ガブリエル、マイケル・ハート、ポール・メイソン、斎藤幸平『資本主義の終わりか、人類の終焉か?』集英社新書、二〇一九年。